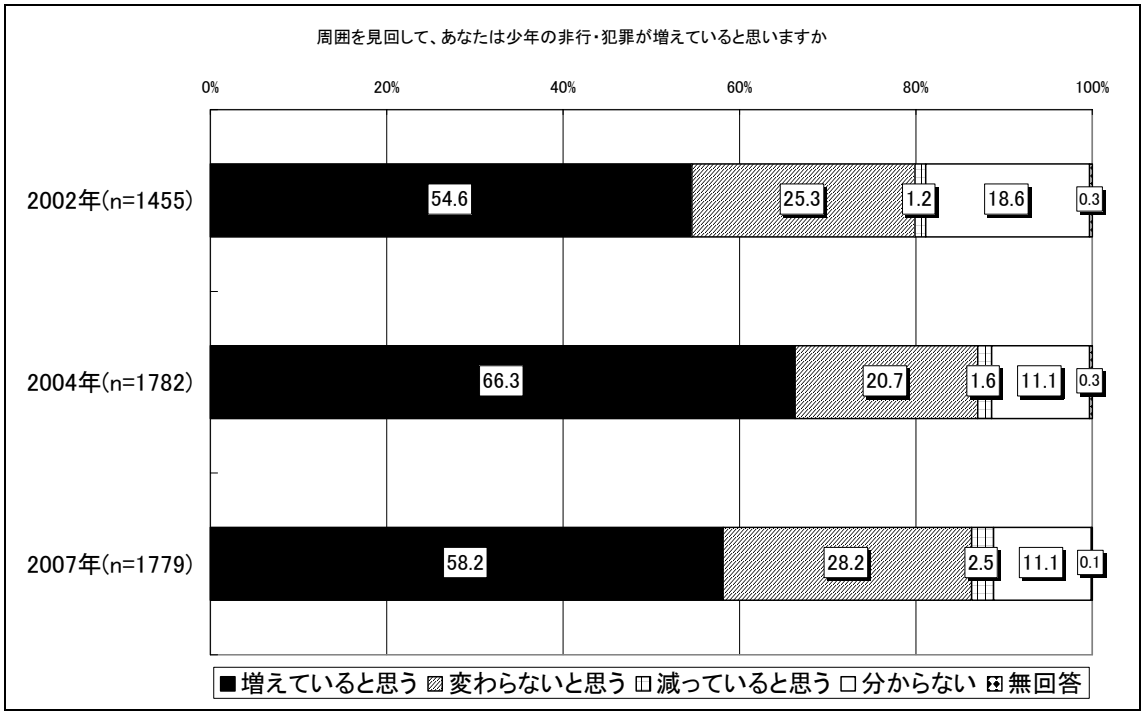
第4章　少年非行

第Ⅱ部の本章では、少年非行に関しての調査結果を提示する。調査項目は、少年非行の量的動向、少年非行の質的動向、少年の犯罪・非行に対しての取り締まりへの要望、問題少年・非行少年に対しての大人の統制力、以上の５つである。これらのうち３項目は前回、ないし前々回の調査結果と比較し、縦断的な考察を行う。

1．少年非行に対する認識の量的動向

「**周囲を見回して、あなたは少年の非行・犯罪が増えていると思いますか**」と尋ね、「増えていると思う」「変わらないと思う」「減っていると思う」「分からない」の４件法で回答を得た。この質問は、第１回調査(2002年)、第２回調査(2004年)、今回の第３回調査(2007年)ともに、質問項目も回答項目も全く同じである。第１回、第２回、第３回の結果をまとめて示したのが**図Ⅱ－４－１**である。

図Ⅱ－４－１　少年非行の量的動向に関する認識



図に見るとおり、「増えている」という回答比率は54.6%→66.3%→58.2%と2002年から2004年にかけては増加し、2004年から2007年にかけては減少傾向を示している。そしてそ

の分2007年では「変わらない」が増えている。おそらく「減っている」という認識にいたることはいつの時代でもかなり少ないのではないだろうか。それ故、「変わらない」という認識は「増えてはいない」という認識とほぼ同一であると理解してよいであろう。

表Ⅱ－４－１－①　少年の非行・犯罪は増えているか

「増えている」の回答比率・性別　（単位 :%）

年	男	女
２００２年	55.4	53.8
２００４年	68.3	64.5
２００７年	56.8	59.6

(注)「増えている」という回答の比率のみを表示した。

これを性別に見てみると表Ⅱ－４－１－①となる。表に示すとおり2007年では、男性よりもいくらか女性のほうが比率が高い。2002年→2004年→2007年の推移では、男は、「増えている」で55.4%→68.3%→56.8%であり、2002年から2004年にかけて12.9ポイント増加し、2004年から2007年にかけて11.5ポイント減少している。ほぼ増加した分減少している。ところが女は、「増えている」で53.8%→64.5%→59.6%であり、2002年から2004年にかけて10.7ポイント増加し、2004年から2007年にかけては4.9ポイント減少している。女のほうが減少率が小さい。その結果、2004年では男のほうが「増えている」という比率はやや高かったが、2007年では逆転し、女のほうがやや高くなっている。ここ３年間の変化は女性よりも男性のほうが激しかったということになる。

表Ⅱ－４－１-②　少年の非行・犯罪は増えているか

「増えている」の回答比率・年齢別　（単位:%）

年	２０歳代	３０歳代	４０歳代	５０歳代	６０歳代	７０歳以上
２００２年	52.5	58.0	59.8	52.6	57.0	44.0
２００４年	65.4	67.4	65.5	66.9	66.8	65.7
２００７年	59.1	54.3	59.7	61.0	60.0	52.2

(注)「増えている」という回答の比率のみを表示した。

同様に年齢別でも見てみよう。表Ⅱ－４－１－②である。表に見るとおり、2007年の「増えている」という回答比率は70歳以上が最も低い。これを第１回から第３回までの調査結果から見ると、2002年→2004年→2007年の推移は、20歳代で52.5%→65.4%→59.1%、30歳代で58.0%→67.4%→54.3%、40歳代で59.8%→65.5%→59.7%、50歳代で52.6%→66.9%→61.0%、60歳代で57.0%→66.8%→60.0%、70歳以上で44.0%→65.7%→52.2%である。

20歳代では12.9ポイント増加し6.3ポイント減少している。増加が激しかったわりには減少は少ない。30歳代では9.4ポイント増加し13.1ポイント減少している。増加以上の減少を示している。40歳代では5.7ポイント増加し5.8ポイント減少している。増加も減少も比率が小さく、しかもほぼ同じである。50歳代では14.3ポイント増加し5.9ポイント減少している。増加に比べ減少がきわめて少ない。60歳代では9.8ポイント増加し6.8ポイント減少している。減少がやや少ない。70歳以上では21.7ポイント増加し13.5ポイント減少している。きわめて高い増加率を示している。そして減少率も他の年代に比べて高い。ただし、増加ほどには減少していない。

以上、全ての年齢で、2002年から2004年にかけては「増えている」という回答の比率が増加し、2004年から2007年にかけては減少している。ただし、年代層によってその推移はいくらか異なる。30歳代のみ増加よりも減少が大きい。40歳代は時代にあまり囚われていない。そして、時代に大きく影響されているのが70歳以上である。

ただし、ここでひと言述べておかなくてはならないことは、以上の年齢分析は、時代変容と世代変容を峻別していない(もしくは、峻別できていない)、ということである。たとえば、2002年の20歳代は2007年ではその半数は30歳代となっている。また、2007年度の20歳代の半数は2002年度では10歳代である。よって、20歳代の変化さらに30歳代の変化は時代の変化と世代の変化とが混在していることになる。しかし、この峻別分析は５年間というスパンでは分析不能である。したがって、今回は時代変容と世代変容の混在として理解していただきたい。

表Ⅱ－４－１-③　少年の非行・犯罪は増えているか

「増えている」の回答比率・都市規模別　　**（単位:%）**

年	東京都区部	政令指定都市	人口 10 万以上の市	人口 10 万未満の市	町村
２００２年	56.4	56.0	58.0	51.6	49.3
２００４年	65.7	70.6	66.4	67.1	62.2
２００７年	62.3	57.6	60.7	55.1	54.9

(注)「増えている」という回答の比率のみを表示した。

表Ⅱ－４－１－②は都市規模別に見た表である。表を見ると2007年では、東京都区部の比率が最も高い、そして農村部は比較的低い。2002年→2004年→2007年の推移を見ると、東京都区部で56.4%→65.7%→62.3%、政令指定都市で56.0%→70.6%→57.6%、人口10万以上の市で58.0%→66.4%→60.7%、人口10万未満の市で51.6%→67.1%→55.1%、町村で49.3%→62.2%→54.9%である。

この都市規模別でも、全ての規模の都市で2002年から2004年にかけては「増えている」

という比率が増加し、2004年から2007年にかけては減少している。東京都区部では9.3ポイント増加し、3.4ポイント減少している。増加に比べ減少が少ない。政令指定都市では14.6ポイントと大幅に増加し13.0ポイントと、これまた大幅に減少している。人口10万以上の市では8.4ポイント増加し5.7ポイント減少している。人口10万未満の市では15.5ポイントと大幅に増加し12.0ポイントと大幅に減少している。町村では12.9ポイント増加し7.3ポイント減少している。このように、増加の激しさに比べると減少はやや弱い。また、2002年から2004年にかけて「増えている」という認識が著しく増加した規模の都市では、逆に2004年から2007年にかけては減少傾向も激しいという傾向が認められる。政令指定都市と人口10万未満の市は非行問題の過熱化と冷却化の激しかった地域であったと言えよう。

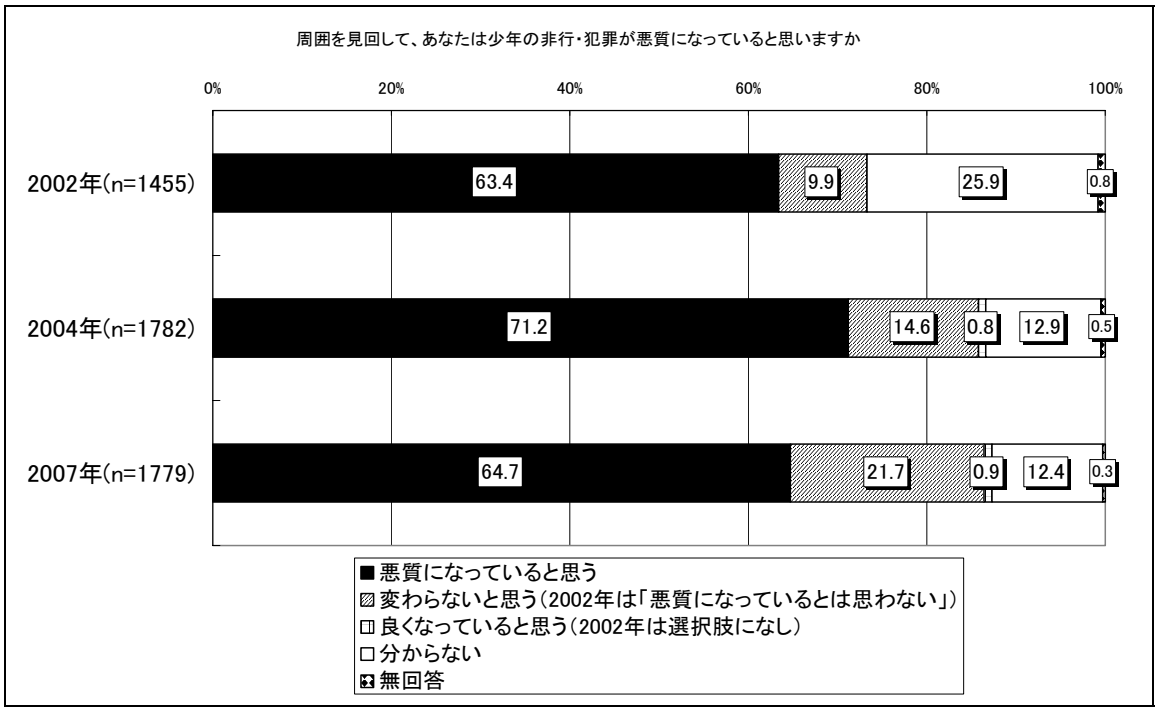
2. 少年非行に対する認識の質的動向

「**周囲を見回して、あなたは少年の非行・犯罪が悪質になっていると思いますか**」と尋ね、「悪質になっていると思う」「変わらないと思う」「良くなっていると思う」「分からない」の４件法で答えてもらった。この質問は、第２回調査(2004年)、今回の第３回調査(2007年)ともに、質問項目も回答項目も全く同じである。ただし、第１回調査(2002年)では質問項目は同じであるが、回答項目が「悪質になっていると思う」「悪質になっていると思わない」「分からない」の３件法になっていて、第２回、第３回とはやや異なる。しかし、前記の「増えていると思うか」という質問でも、「増えている」という回答のみで時代の推移を分析することは十分可能であった。よって、ここでもそうした手法で、2002年から2004年の推移、そして2004年から2007年の推移を見ていきたいと思う。

まずは、その結果の全体を**図Ⅱ－４－２**にて示した。2002年は３件法であり、また「分からない」という回答が2004年、2007年に比べ倍ほどあるので、正確な比較はできないが、おおまかな比較なら可能である。

「悪質になっていると思う」という回答比率は、2002年から2004年にかけて7.8ポイント増加している。そして2004年から2007年にかけては6.5ポイント減少している。ほぼ増加した分減少した、ということである。

図Ⅱ－４－２　少年非行の質的動向に関する認識



表Ⅱ－４－２－①　少年の非行・犯罪は悪質になっているか

「悪質になっている」の回答比率・性別　　（単位 :%）

年	男	女
２００２年	64.8	62.2
２００４年	73.0	69.5
２００７年	63.9	65.4

(注)「悪質になっている」という回答の比率のみを表示した。

「悪質になっていると思う」という回答比率を性別に見てみると、**表Ⅱ－４－２－①**に示すとおり、2007年では男性よりも女性のほうがいくらか比率が高い。

2002年→2004年→2007年の推移を見ると、男では64.8%→73.0%→63.9%であり、2002年から2004年にかけて8.2ポイント増加し、2004年から2007年にかけて9.1ポイント減少している。ほぼ増加した分減少しており、少年非行・犯罪に対しての悪質という認識は2002年度にまで回復している、と言える。女では62.2%→69.5%→65.4%であり、2002年から2004年にかけて7.3ポイント増加し、2004年から2007年にかけては4.1ポイント減少している。女性のほうが男性に比べ増加も減少も小さい。特に2004年から2007年にかけての減少率が小さかったので、その結果、2007年では女性のほうが「悪質になっていると思う」という認識がやや強くなっているのである。この推移の動向は、前記の「増えている」という量

的推移の動向と一致する。量的・質的ともに同じ動向を示しているわけである。

表Ⅱ－４－２-②　少年の非行･犯罪は悪質になっているか

「悪質になっている」の回答比率･年齢別　（単位:%）

年	２０歳代	３０歳代	４０歳代	５０歳代	６０歳代	７０歳以上
２００２年	67.3	71.6	69.3	60.7	61.9	44.6
２００４年	72.8	74.1	71.3	71.8	71.2	64.9
２００７年	71.2	63.7	63.1	67.0	63.4	55.9

(注)「悪質になっている」という回答の比率のみを表示した。

次に、年齢別に見てみる。**表Ⅱ－４－２－②**をご覧いただきたい。2007年では「悪質になっていると思う」という回答比率が最も高いのは20歳代である。そして最も低いのは70歳以上である。2002年→2004年→2007年の推移を見ると、「増えている」という量的推移と同じ動向を示しており､20歳代で67.3%→72.8%→71.2%､30歳代で71.6%→74.1%→63.7%、40歳代で69.3%→71.3%→63.1%、50歳代で60.7%→71.8%→67.0%、60歳代で61.9%→71.2%→63.4%、70歳以上で44.6%→64.9%→55.9%となっている。

20歳代では5.5ポイント増加し1.6ポイント減少している。さほど増加しなかったが減少はさらに少ない。この少なさが、20歳代を最も高い比率にしたわけである。2004年から2007年にかけて20歳代では変化していない、と言ってよいであろう。30歳代では2.5ポイント増加し10.4ポイント減少している。増加率が少ないにもかかわらず減少率は大きい。40歳代では2.0ポイント増加し8.2ポイント減少している。30歳代同様、増加率が少なく減少率が大きい。50歳代では11.1ポイント増加し4.8ポイント減少している。増加が大きいのに比べ減少は小さい。60歳代では9.3ポイント増加し7.8ポイント減少している。増加と減少が近似している。70歳以上では20.3ポイントときわめて激しく増加し､9.0ポイントと減少している。

以上、全ての年齢で、2002年から2004年にかけては「悪質になっていると思う」という回答の比率が増加し、2004年から2007年にかけては減少している。この動向は前記の少年の非行・犯罪の量的動向と一致する。つまり、少年の非行・犯罪は、2002年から2004年にかけては量的には増大し、質的には悪質化したが、2004年から2007年にかけては量的には減少し、質的には悪質化が緩和された、という人々の認識の推移を描くことが出来るのである。ただし、年齢層によってその推移はいくらか異なる。30歳代と40歳代、60歳代はここ3年間の減少が著しい。それに比べ、20歳代と50歳代はさほど減少していない。量的認識と質的認識に同一の傾向を示したのは70歳以上である。激しく上昇し、そして激しく減少している。量的にも質的にも70歳以上は、時代に大きく影響されているようである。

表Ⅱ－4－2-③　少年の非行・犯罪は悪質になっているか

「悪質になっている」の回答比率・都市規模別　（単位:%）

年	東京都区部	政令指定都市	人口10万以上の市	人口10万未満の市	町村
２００２年	64.1	67.9	67.0	58.9	57.3
２００４年	74.1	72.0	70.9	72.2	69.5
２００７年	65.8	64.5	67.5	61.4	61.5

(注)「悪質になっている」という回答の比率のみを表示した。

最後に都市規模別でも見てみる。**表Ⅱ－4－2－③**である。「悪質になっている」の回答比率は、2007年では人口10万未満の市と町村で多少低い数値を示しているが、ほとんど差異は見られない。また、2002年→2004年→2007年の推移を見ると、東京都区部では64.1%→74.1%と大幅に増加し、74.1%→65.8%とこれまた大幅に減少している。政令指定都市では67.9%→72.0%→64.5%と、増加し減少しているが、東京都区部ほどの急激さはない。人口10万以上の市では67.0%→70.9%→67.5%と増減の差が小さく、2007年は2002年にまで悪質という認識は戻っている。人口10万未満の市では58.9%→72.2%→61.4%と、13.3ポイントの増加と10.8ポイントの減少という最も激しい動向を示している。町村で57.3%→69.5%→61.5%と、ここも激しい増減を示している。

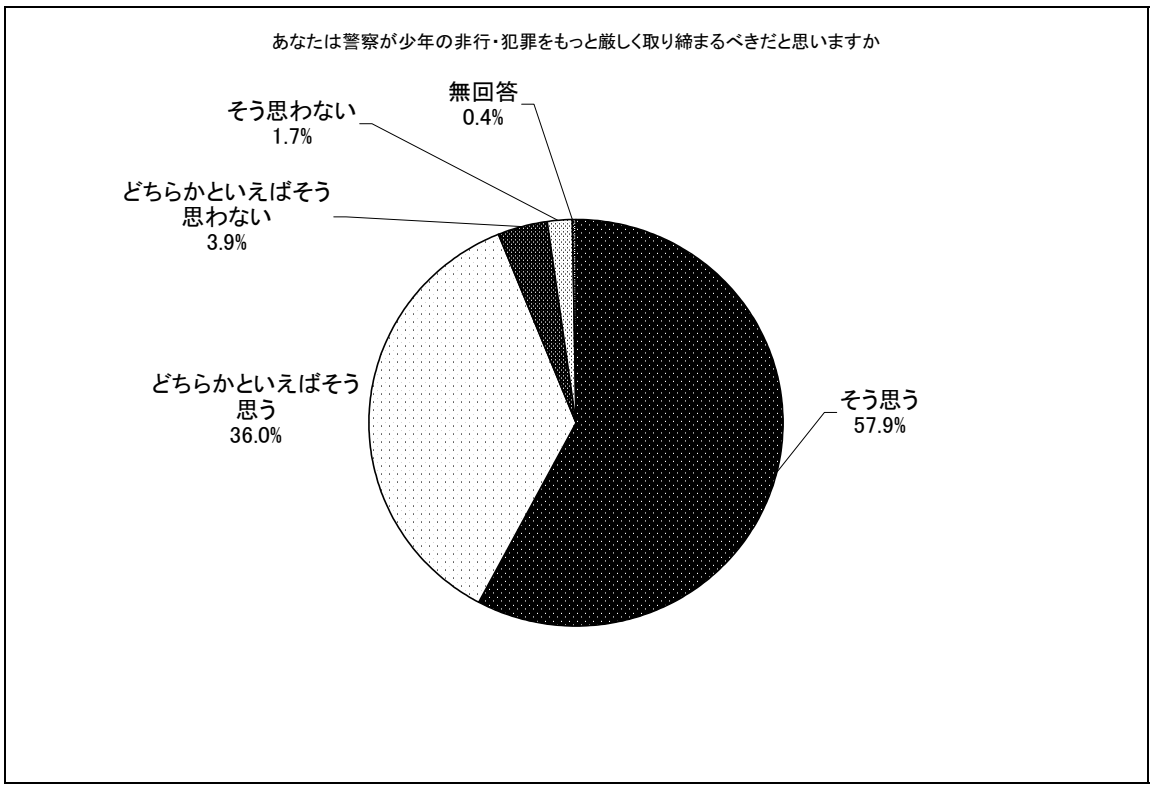
いずれにせよ、この都市規模別でも、全ての規模の都市で2002年から2004年にかけては「悪質になっている」という比率が増加し、2004年から2007年にかけては減少している。このことは、前記の「増えている」という量的推移と同一の傾向を示している。そして、2002年から2004年にかけて「悪質になっている」という認識が急に増加した規模の都市では、逆に2004年から2007年にかけては減少傾向も激しいという傾向が認められる。面白いことに、このこともまったく少年の犯罪・非行は「増えている」という量的推移と同じである。

3. 警察の少年非行・犯罪に対する取り締まり強化に関しての意見

「あなたは警察が少年の非行・犯罪をもっと厳しく取り締まるべきだと思いますか」と尋ねて、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の４件法で回答を得た。これは前回、前々回にない、今回だけの質問である。

図Ⅱ－4－3は、その結果を図に表わしたものである。「そう思う」が 57.9%と、６割近い人が「もっと厳しく取り締まるべきだ」と思っていることが分かる。それに「どちらかといえばそう思う」の 36.0%を加えると 93.9%となる。つまり 20 人に 19 人は「もっと厳しく取り締まるべきだ」という方向性を支持していることになる。

図Ⅱ－4－3　少年非行・犯罪取り締まり強化に関しての意見



これを性別に見ると、「そう思う」は男で 58.1%、女で 57.7%であり、また「どちらかといえばそう思う」を加えた数値では、男は 92.8%、女は 95.0%で、差異は見られない。つまり、男女間に差異はない。

年齢別では、「そう思う」の回答比率は 20 歳代で 61.6%、30 歳代で 61.3%、40 歳代で 56.6%、50 歳代で 53.8%、60 歳代で 55.1%、70 歳以上で 62.1%。20 歳代・30 歳代・70 歳以上でいくらか比率が高いが、これに「どちらかといえばそう思う」を加えると、20 歳代で 93.3%、30 歳代で 96.7%、40 歳代で 94.9%、50 歳代で 92.3%、60 歳代で 92.8%、70 歳以上で 93.8%となり、ほとんど差異がなくなる。よって、年齢別でも回答に差異は認められない。

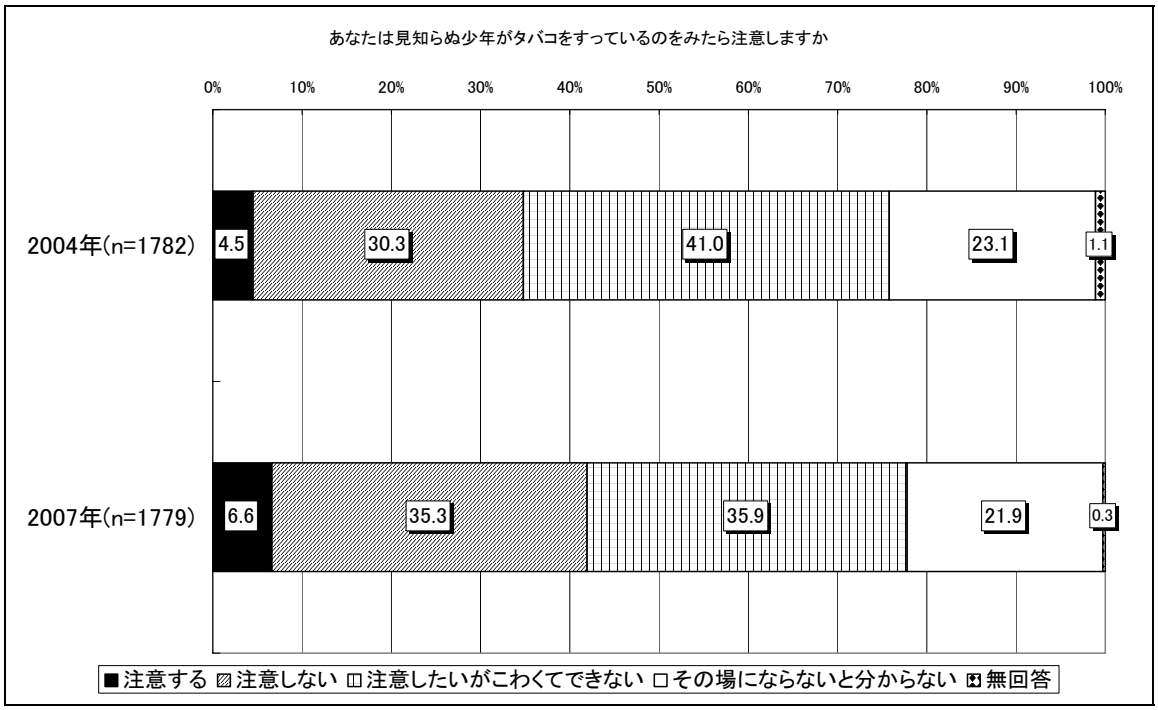
4. 少年の喫煙への注意

(1)知らない少年の場合

大人は、少年が問題行動・非行を行っているときに、どれほどの統制力を発揮することが出来るのだろうか。具体的には、いけないことに対して「いけない」と、どれほど注意することが出来るのだろうか。２つの質問で、それの回答を求めてみた。１つは「**あなたは見知らぬ少年がタバコをすっているのをみたら注意しますか**」。今１つは「**あなたは知**

っている少年がタバコをすっているのをみたら注意しますか」というものである。両者の違いは、知っている少年か知らない少年か、ということである。回答項目はともに「注意する」「注意しない」「注意したいがこわくてできない」「その場にならないと分からない」である。前者の質問は前回の調査(2004 年)でも行われている。そこで、前者に関しては前回調査とも比較する。

図Ⅱ－4－4　少年の喫煙への注意・見知らぬ少年の場合



図Ⅱ－4－4は、見知らぬ少年がタバコを吸っている場合について、2004 年調査と 2007 年調査を図にしたものである。図にみるとおり、両年の差異はほとんど見られない。「注意しない」と「注意したいがこわくてできない」の回答の合計は７割を超えており、注意する人はおよそ５％である。

2007 年調査を性別に見ると、表Ⅱ－4－4－①となる。男性と女性では回答にかなりの違いが見られる。「注意する」の比率は男の 9.4%に比べ女は 4.0%と、かなり低い。しかし、「注意しない」では、男 40.4%、女 30.3%と男性のほうに注意しない人が多い。女性に多いのは「注意したいがこわくてできない」という回答である。ここでは男が 21.8%であるのに対して女は 49.5%である。実に半数の女性が、怖くて出来ないでいるのである。女性が、一人で気楽に声を掛ける、といったような行為ではないことがよく分かる。男性に多いのは「その場にならないと分からない」で、女が 15.8%に対して男は 28.2%となっている。男性の場合は、その場で、相手を見て、様子を伺って、怖ければやめよう、というこ

となのであろう。したがって、女性は最初から、怖くて出来なくて、男性は結果として出来ない、ということになるのではないだろうか。

表Ⅱ－4－4－②は年齢別に見た表である。「注意する」という人の比率は上がるにつれて多くなる。70 歳以上のお年寄りでは 20 歳代・30 歳代・40 歳代の３倍以上となっている。逆に、「注意しない」は年齢が若いほど比率が高くなっている。70 歳以上では 20.5%なのが 20 歳代では 54.4%で、実に 33.9 ポイントの開きを示している。また、「注意したいがこわくてできない」という回答比率では、年齢が上がるにつれて比率が高くなる。20 歳代で 24.2%が 70 歳以上では 47.8%と、半数近くにまで及ぶ。こうした傾向は男女の違いの傾向と類似する。回答の傾向が女性はお年寄りに近く、男性は若者に近いのである。

表Ⅱ－4－4－①　少年の喫煙への注意･見知らぬ少年の場合･性別　　（単位 :%）

性	注意する	注意しない	注意したいがこわくてできない	その場にならないと分からない	
男	9.4	40.4	21.8	28.2	(N=876)
女	4.0	30.3	49.5	15.8	(N=903)

(注)無回答は表から除いてある。したがって、パーセントの合計は 100 とはならない。

表Ⅱ－4－4－②　少年の喫煙への注意･見知らぬ少年の場合･年齢別　　（単位 :%）

年齢	注意する	注意しない	注意したいがこわくてできない	その場にならないと分からない	
２０歳代	4.3	54.4	24.2	17.1	(N=281)
３０歳代	4.0	43.3	29.6	22.9	(N=328)
４０歳代	4.1	37.3	34.2	24.4	(N=295)
５０歳代	6.0	31.6	41.2	20.3	(N=364)
６０歳代	10.0	21.4	41.4	26.9	(N=350)
７０歳以上	14.9	20.5	47.8	16.8	(N=161)

(注)無回答は表から除いてある。したがって、パーセントの合計は 100 とはならない。

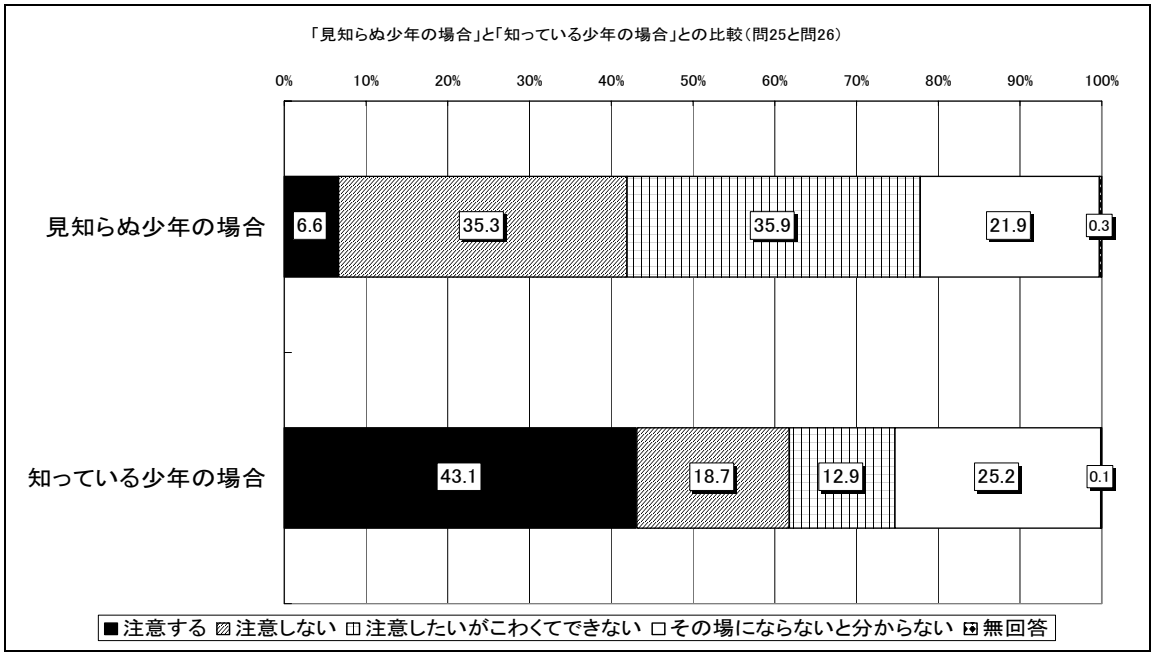
(2)知らない少年の場合と知っている少年の場合との対比

次に、「知っている少年の場合」を見てみる。**図Ⅱ－4－5**は、少年の喫煙への注意に関して、「見知らぬ少年の場合」と「知っている少年の場合」とを比較した図である。図に見るとおり、見知らぬ少年の場合では「注意する」の回答比率は6.6%ときわめて低いが、知っている少年の場合では「注意する」という回答比率は43.1%と、かなり高くなる。そして、「注意しない」の回答比率が35.3%から18.7%へと、「注意したいがこわくてできない」の回答比率が35.9%から12.9%へと、かなりの減少を示している。タバコを吸っている少年を

知っているか知らないかで、これほどに大きな差異が出てくるのである。

これがもしも、「よく知っている少年」だったり「親しい少年」だったならば、さらに「注意する」の比率は増えることであろう。地域の人間関係の重要さはここにある。非行防止も安心・安全の地域づくりも、地域の人間関係が希薄化してしまったが故の活動であって、互いによく知り合っているならば、そのようなことをわざわざしなくても良いのである。

図Ⅱ－4－5　少年の喫煙への注意



表Ⅱ－4－5－①　少年の喫煙への注意

「見知らぬ少年の場合」と「知っている少年の場合」との比較・性別　　（単位 :%）

性		注意する	注意しない	注意したいがこわくてできない	その場にならないと分からない	
男	見知らぬ少年	9.4	40.4	21.8	28.2	(N=876)
	知っている少年	50.7	20.2	6.7	22.4	
女	見知らぬ少年	4.0	30.3	49.5	15.8	(N=903)
	知っている少年	35.8	17.2	18.9	27.9	

(注)無回答は表から除いてある。したがって、パーセントの合計は 100 とはならない。

以上のことを性別に見てみる。表Ⅱ－4－5－①である。

「注意する」が男では 9.4%から 50.7%へ、女では 4.0%から 35.8%へときわめて著しく増加している。逆に「注意しない」と「注意したいがこわくてできない」が著しく減少している。男性も女性も、知っている子であるならば、注意できるのである。ただし、女性は

知っている少年でも「その場にならないと分からない」という回答が多い。知っていても、やはり躊躇するのであろう。

さらに、年齢別でも見てみた。**表Ⅱ－４－５－②**である。

どの年齢層でも、知っている少年の場合は、「注意する」という回答比率が著しく増加している。そして逆に、「注意しない」と「注意したいがこわくてできない」という回答比率が減少している。

以上、男性も女性も、そして若い人も中年もお年よりも、少年を知っていれば、注意しやすいのである。これは何も喫煙だけに限られることではないだろう。子どもたちへの地域の非行防止抑止力は、知っているという、さらに言えば、よく知っているという人間関係が大きな因子になっていることが分かる。

表Ⅱ－４－５－② 少年の喫煙への注意

「見知らぬ少年の場合」と「知っている少年の場合」との比較・年齢別 （単位 :%）

年齢		注意する	注意しない	注意したいがこわくてできない	その場にならないと分からない	
20 歳代	見知らぬ少年	4.3	54.4	24.2	17.1	(N=281)
	知っている少年	37.0	31.3	8.9	22.8	
30 歳代	見知らぬ少年	4.0	43.3	29.6	22.9	(N=328)
	知っている少年	44.2	20.4	10.7	24.7	
40 歳代	見知らぬ少年	4.1	37.3	34.2	24.4	(N=295)
	知っている少年	45.8	14.9	10.8	28.5	
50 歳代	見知らぬ少年	6.0	31.6	41.2	20.3	(N=364)
	知っている少年	40.7	17.9	13.7	27.5	
60 歳代	見知らぬ少年	10.0	21.4	41.4	26.9	(N=350)
	知っている少年	46.6	12.0	16.0	25.1	
70 歳以上	見知らぬ少年	14.9	20.5	47.8	16.8	(N=161)
	知っている少年	44.7	16.1	19.9	19.3	

(注)無回答は表から除いてある。したがって、パーセントの合計は 100 とはならない。

5. まとめ

本章をまとめると、次のようになる。

第１に、少年の非行・犯罪は増えているか否か、という認識では、2002 年から 2004 年にかけては「増えている」という回答が増加し、2004 年から 2007 年にかけては「増えている」という回答は減少している。

第２に、少年の非行・犯罪は悪質になっているか否か、という認識でも、2002 年から 2004 年にかけては「悪質になっている」という回答が増加し、2004 年から 2007 年にかけては減少している。少年の非行・犯罪に対しての人々の認識は量的にも質的にも同一の変化を示しているのである。

第３に、警察の少年非行・犯罪に対しての取り締まり強化に関しての意見では、６割近い人が「もっと厳しく取り締まるべきだ」という意見である。それに「どちらかといえば」をくわえれば、20 人に 19 人が「もっと厳しく取り締まるべきだ」という方向性を支持している。

第４に、少年の喫煙に対しての注意では、知らない少年の場合には、ほとんどの人は注意しない。注意したいが怖くてできないのだ。その傾向は女性に、そしてお年寄りに顕著である。知っている少年の場合では、「注意する」という人が著しく増加し、４割を超える。このように、知っている・知らないということが、大人が子どもを注意する際の大きな要素になっている。これは何も喫煙だけに限られることではないだろう。地域の非行防止抑止力は、知っているという人間関係が大きな因子になっていることが分かる。